

# 新十津川物語

## ○ 概 要

今から130年前の明治22年（1889年）奈良県吉野郡一帯が壊滅的な未曾有の天災（暴風雨による大水害）に見舞われた。

十津川村・郷の地域一帯は被害が甚大で、当時この戸数 2,862 戸、人口 12,862 人であったが、死者 168 人以上、負傷者 20 人、全壊・流失家屋 426 戸、水田の 50%、畑の 20%が流亡、山林の被害も甚大であった。

そのままでは生活を立て直すことが困難な人々は、当時の政府の方針に従って 641 戸、2,587 人が北海道に集団で移住をした。この時に移住した人々がつくったのが現在の樺戸郡新十津川町であった。

## ○十津川村

「鳥も通わぬ十塚の里」と太平記には記されており、高野山の麓、吉野の奥にある山岳重畳の僻地にある。

ここは、紀伊半島の中央部を占める。和歌山・三重県に接する奈良県最南端に位置しており、村面積の 98%を占める森林と、さらに水資源に恵まれた村であり、面積は 672.35 平方メートルで、奈良県の5分の1の広さを占め、村としては日本一の広さを持つ。かつては秘境であると言われたが、その後ダム、道路等が建設されて現在は林業、観光業を主産業としている人口約 3,400 人の雄大な自然に恵まれた村である。温泉資源にも恵まれている。

大峰山に発源する河川の『十津川』の中流、下流がこの村域を流れており、所々に急流があり、流域の木材を筏に組んで流した。

『紀伊山地の霊場と参詣道』として登録された大峰奥駆道と熊野参詣道小辺路はこの村を通る。千年以上も前から人々が祈りを捧げてきた聖地である。今日まで人々の厚い信仰に支えられ、多くの文化遺産や自然の景観が残り、平成 16 年には「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録をされた。また瀨八丁もある。

## ○十津川大水害

・明治 22 年（1889 年）8 月 18 日、19 日のことである。大雨がこの地に降り注いだ。このとにかく凄まじい風雨であった。地鳴りもあり、雨は一面に天よりドシャブリより激しく、桶の水をぶちまけたように水の幕みたいに降りつけた。

崖はあちこち崩れ、木々は倒れる。少ない面積の畑の土は流れ出す。崖に沿って通る細い道は、あちこちで欠け落ちて通れない。山の斜面はにわかになされた川のために深くえぐられている。山の斜面から水が丸太棒のようになって噴き出してくる。多くの段々畑はまるで噴水を見ているようであった。

山津波により、広い山の斜面全体が滑り落ちてあとかたもなく残っていなかったところもかなりあった。多くの集落も影も形もなく闇の中へと消えていった。まるっきり地形が変わってしまった。壊滅的な被害を

この地にもたらしたと言えよう。十津川が刻んだ谷を土砂が天然ダムとなり多くの堰止湖をつくり、決壊による洪水での被害は甚大であった。

3日経っても雨は衰えなかった。

・原因 秋雨前線が日本近海に停滞しているところへ、台風が南海上から接近、8月18日、19日にかけて和歌山県から奈良県の南部に大雨をもたらした。南西雨が強く吹き、711mbの低気圧、風速40メートルを伴ってこの地を襲った。

累計降雨量は約1000ミリ。この地の地質は、四万十帯（砂岩、泥岩など）。

天然ダム53か所。湛水量約80メートル。移動土塊量約660万m<sup>3</sup>。

死者168名。全壊流出家屋426戸。半壊まで含めると全戸数の四分の一にあたる家屋に損害がでた。

田畑、山林の流失等により、生活の基盤を失った者は約3000人にのぼり、県の役人が「旧計に復するのは蓋し30年の後にあるべし」と記したほどであった。

## ○新天地を求めて

・尊皇愛国の念は、ロシアに対する北方防備の任たる『北門の鎖鍵』を担うものに相応しいと、永山武四郎北海道庁長官の勧めを受けて、北海道の原野であるに新十津川の創立をうながされた。そこで、田畑を失った村民約600戸、2,489人が新天地を求めて旅立った。その新天地というのが、「トック」、今の樺戸郡新十津川町である。

・明治2年の国郡画定の際、ここはとりあえず山口藩の支配を経て、すぐに開拓史直轄となった。アイヌ民族もいくらか居住をしていた。

・移民たちは、明治22年10月、3班に分かれて新十津川を目指して、船で小樽や函館に上陸、三笠（市木知・いちきりし）までは石炭列車に乗り、そこからは滝川空知太（そらちぶと）までの52キロを囚人に助けられて、徒歩でたどり着いた。奈良県の十津川村から新十津川は距離にして1200キロ。三笠からの道は悪路であり、箇所も多く、あちこち遠回りをさせられた。

途中で、囚人小屋に泊まったりした。また、荷物運搬のために大勢の囚人を動員し、その数3500個の荷物があつたという。凍土のぬかるみの中を歩いた。それらの荷物の中身は移民保護のために、各人に2年分の食料、味噌、農具、種子等が給与された物品も多く含まれていたという。

当時、この地区には、樺戸集治監（月形町）、及び空知集治監（三笠市）があり、そこから派遣をされた囚人たちにより、十津川移民たちの荷物の運搬等を支えていた。他に、囚人たちは、北海道の開拓労働である道路建設整備、炭鉱労働等にあたっていた。初期の入獄者は西南戦争等の不平士族、明治17年の加波山事件、秩父事件等の思想犯が多かったという。

## ○温暖なところから寒い場所へ渡ってきた人々の中には、空知太に到着するまでに船や汽車のなかで死亡したり、また出産する人々もいた。

・当時の戸籍簿からの調査によると、明治22年11月から23年7月の間に96人が死亡している。囚人たちが櫓引き音頭に「大和の移住民は空知の肥だよ」と歌ったほど、途中の行程及びこの冬の生活は凄惨なものだったという。

空知太で建設中だった屯田兵屋一棟 17.5 坪に4戸（平均 16 人）が入居させられ、布団は4人に一枚しかなかったと言われている。兵屋はクマザサで覆われ、ヒグマが時々現れたという。恐れられた。

## ○新十津川へ

・翌年6月、渡し船で石狩川を渡り、新十津川（トック原野）にたどり着く。樹海とクマザサが生い茂ったところである。

大勢の移住民を乗せて船は何度も往復した。

たどり着いたもの。537戸、2224名。屯田兵に志願したものも多かった。

入植地は石狩川沿い、抽選によるもので、一区画 15,000 坪（5町歩）、移住家屋は掘っ建て丸木組で3間に4間 12 坪の広さであった。

あまりにも、粗末な小屋であった。タタミ、天井板などない。空知太の兵屋の方がずっと良かったとか。それでも、そこが自分がこれから生活をしていく住まいであるという希望が持てた。いろいろと改善をしていけばよい。

十津川に比べれば、10月中旬から降雪がはじまり、4月まで雪が消えない、約半年間の厳しい環境であるが。

## ○新十津川の開拓

・この地には、昔から（江戸時代）、アイヌの居住区があった。明治9年には、記録によると、5戸17人が居住していたという。

・そこに、明治23年に奈良県の十津川からの移民がやってきて、この開拓の歴史がスタートするのである。

・明治23年1月に、行政上にも十津川村が成立した。

・前年の秋から約半年間を石狩川対岸で待機していた。待ちに待った新天地での生活の始まる春になった。森の中、一面にフキノトウ、ヤマウド、福寿草が芽を出してきた。イタドリも一面に平地を覆ってきた。ウグイスも鳴きだした。

・開墾作業はこの年の春から、スタートした。入植地であるトック原野は昼なお暗い原始林に覆われた三回の土地で、特に中徳富（中央地区）には、檜の木やカエデ、ヤチダモやアカダモの大木や、それらの木の下には、この黒々とうねる大人の背丈をこすクマザサが生い茂っていた。

それらの大木を一本ずつ切り倒し、切り株を掘り起こし、クマザサを刈り、乾いたら火をつけ、少しずつ開拓していった。機械の導入はまだなく、すべて手作業によるものであった。

道具はノコギリやクワ、マサカリなどの開拓作業は、文字通り、血と涙と汗の毎日で、昼間はブヨに食いつかれ、夜は蚊に悩まされた。

少しずつ、木を切り倒し、土地を平らにして畑として、とりあえず蕎麦の種を蒔いた。

蕎麦は生育期間が短く、種子は乾燥地でもよく発芽し、肥料もあまり必要としないので開墾地、傾斜地、不良土でもよく育つ。そのために救荒作物として使われている。栄養価も高い。

大根も植えた。越冬をするための漬物用として利用した。大量に漬けられ、長い冬を凌げるように。タモの木でつくった風呂に入った。

この年の作物は、他にはなく、蕎麦と大根くらいであった。

一年目は畑の土地を整備するために力を注いだ。精力的に行った。

・入植した年の収穫は、上記のように蕎麦と大根くらいであったが、2年目(明治24年)からは本格的な作付けが行われた。麦、トウキビ、アワ、イナキビ、大豆、馬鈴薯、カボチャなどがつくられた。

移民には、2年間は食料が支給されていたので、開墾に専念することが出来た。それほど十津川からの移住者は恵まれていた。

明治25年、道庁により、プラオによる馬耕が実演、翌年、ここにも導入され、人力から畜力へと急速に開墾の実績があがった。

・明治29年には札幌製麻株式会社が亜麻(あま・あまにゆ、繊維、塗料、油彩等に使用)製線所の操業を始め、亜麻耕作を奨励した。この頃から、愛媛県、徳島県、富山県からも移民が来るようになった。人口も増加した。

・明治30年にはヨトウムシの被害、翌31年には大水害などの困難を乗り越えて、同33年入植後10年が経過して、土地の所有が確定した。この頃の戸数976戸、人口5,813人であった。そのほかにアイヌの戸数は11戸で60人がここに暮らしていた。

家畜は馬420頭、豚442頭。

しかしながら、村の財政は逼迫した。他府県からの移民も増加した。鳥取県、和歌山県、新潟県等からである。

・河川堤防には大麻、亜麻の栽培のために、桑の木が植えられた。

当時、栽培されていたのは、大豆、小豆、亜麻、ネギ、黍(きび)、あぶらな、タマネギ、大麦、小麦、裸麦、菜豆などである。

米作は、やっと明治27年に試作をされ徐々に拡大していった。

林業を生業としてきた十津川出身者が、米作を主産業とするにはいくつかの試練があったという。本格的に、水田化事業を推進できたのは、富山県、新潟県の水田地帯出身者が、移住して、大きく寄与した以降である。

・村域は、各地からの移民を受け入れたり、山間部までの入植も終わり、新耕作地の開墾により、徐々に拡大をしていき、村の基盤もゆるぎないものとなった。明治38年には戸数1,681戸、人口8,893人となった。既墾地は田112町歩、畑2,827町歩程までに拡大していった。

## 新十津川物語の作者・川村たかしについて

・昭和6年(1931年)奈良県五條市近郊の農家の長男として生まれる。

経歴 奈良学芸大学卒業、定時制高校の教員を経て、大阪梅花女子大学の教授をつとめて、作家活動に入り、児童向け長編小説である『新十津川物語』を含めて著書は120冊を越える。しかしながら、児童文学であっても、大人の心に届くような土の豊饒を伝える作品作りをしてきた。平成22年79歳で逝去。

・受賞歴は、各種文学賞、紫綬褒章等。

・川村氏は幼少時より、いつとはなく十津川郷の災害について聞かされており、いつかはこの史実を舞台に長編小説を書いてみたいと構想を練っていた。

取材を始めたのは昭和47年。その5年後に第1巻「北へゆく旅人たち」が刊行された。結局、平成2年まで、取材を始めて第10巻が完結するまで約20年の歳月を要している。「雄大な自然に広がる北海道と、大移住は魅力ある題材であった。」と語っている。

・物語に登場する主人公は、フキ9歳。災害で両親を失い、兄と2人で、叔父夫妻に連れられて、北海道の新十津川を目指す。そこで、主人公の津田フキをとおして、新十津川近代100年の史実を背景に、開拓の先駆者となってクワを振るう女の一生を、4代にわたり描いたものである。

・平成2年、NHKが新十津川村のドラマの撮影を開始、町内各所でロケを行い、町をあげてドラマの制作に協力、明治、大正、昭和が全国放映された。

町では、平成7年に川村たけしの業績を顕彰して、ふるさと公園内に物語記念館を建設した。そこには津田フキ(18歳)の像が、奈良県の母村を望んでたたずんでいる。奈良県からも、フキ(9歳)の像が、北海道を見つめてたたずんでいる。

## 五條市(奈良県) 奈良県中西部にある市

・人口約3万人で毎年漸減している。

西に流れる吉野川(和歌山県に入ると紀ノ川)流域の河岸段丘が発達しており、北に金剛山の麓に位置する。吉野山地への入り口でもある。

大和国と熊野、和歌山、伊勢を結ぶ交通の要所にあり、宿場町として栄えた。

・慶長年間(1596年から1615年)に松倉氏(1万石)が居城したが、まもなく江戸幕府の直轄地となった。

その後、松倉重政は、大坂の陣後4万石に加増されて1616年に島原に移封された。そこで、キリシタン弾圧を行い、島原の乱の原因となった。島原の領主時代に、農民に対して過重な年貢の負担を強要し、延滞者には過酷な刑罰を科した。

・1795年に五條代官所が設置された。なお、天誅組がここを1863年襲撃、代官を殺害した。

## 北海道移民の変遷

・初期 戊辰戦争に敗れた藩士などが、士族移民として入植した。

・明治9年(1886年) 士族主体の屯田兵が、琴似を皮切りに札幌周辺に入植した。

・明治19年(1886年)『北海道土地払下規則』、明治30年(1897年)『北海道国有未開地処分法』により、国有未開地の私有化が進展し、華族や政商などの資本家による大土地所有が実現する一方、移民団体と呼ばれる数十人規模の地縁に基礎づけられた集団による入植も行われた。

・十津川移民に限らず、災害が各地で頻発した1890年代は、上記2件の規則、法律が施行されたこともあり、法環境も整い北海道の入植が行いやすくなっていた。このことが多くの移住が生まれる後押しとなっていた。

・具体的な事例をあげてみると、

上川郡愛別村には、明治28年に連年の水害と震災から逃れてきた岐阜団体55戸、さらには明治24年の濃尾大震災の被災者からなる愛知団体が入植した。

明治41、42年には、山梨県下の水害罹災者が俱知安村と弁辺村(現豊浦町)に入った。

・北の大地北海道は、日露戦争後の東北凶荒、大正12年の関東大震災、米軍の都市爆撃による被災者等々、災害と戦災で生活の場を破壊された者の逃げ場であった。

これは、国による施策であり、北の大地におくられた逃亡の民が、いかに開拓の捨て石とされたか、新十津川移住民が眼にした世界・厳しい体験と変わりはなかったとも言えよう。

・北海道大学の研究者たちは、これらの事例について、市町村史、消防庁の資料等に基づいて悉皆調

査を行った。年代別に集計をしたところ、1890年代（明治24年～31年）に特に多くの事例が多いことに分かった。

すなわち、明治24年の濃尾大地震および明治26年の長良川氾濫による岐阜県の被害、明治28年、29年の北陸の九頭竜川の氾濫等による土砂災害による富山、石川、福井県の被害が多かった。

- ・北海道開拓時代の移住者数は、明治6年 34,000戸 168,000人  
明治30年 164,000戸 786,000人 であった。

そこで、濃尾大地震についての事例を列举してみよう。

濃尾大地震は、明治24年10月24日6時37分、岐阜県南部から愛知県地方に発生したマグニチュード8.0の大地震である。最大有感距離は800キロに達したといわれ、近年、日本の内陸部で起こった地震としては最大規模である。死者は7273人、負傷者は1万7175人に及び、全壊家屋は14万戸を数えた。

この地震によって犬山市東方から福井県下にわたって、長さ80kmの根尾谷断層ができ、根尾川沿いの水鳥（みどり）部落では高さ6mの断層差が生じ、それには4mの横ずれも伴っていたという。長さは1kmにわたっていた。現在は特別天然記念物となっている。

## 参考文献

開村の歴史と新十津川物語 新十津川物語記念館、新十津川物語 川村たかし 偕成社、  
災害を契機とする北海道移住に関する基礎的研究 北海道大学、2つの十津川 奈良・北海道  
1200キロ隔て「母子の村」日本経済新聞社、十津川の成立 十津川村、悲愁一大和十津川卿から  
北海道の新十津川へ 大濱徹也 日本文教出版、1889（明治22年）十津川災害 国土交通省、  
勤皇がとりもつ新十津川村の誕生 加藤昇 歴史研究、北海道大百科事典、等